

デカダン文学論

坂口安吾

青空文庫

極意だの免許皆伝などというのは茶とか活いけ花ばなとか忍術とか剣術の話かと思つていたら、関せき孝和たかかずの算術などでも齋さい戒かい沐浴もくよくして血判を捺おし自分の子供と二人の弟子以外には伝えないなどやっている。尤も西洋もつとでも昔は最高の数理を秘伝視して門外不出の例はあるそうだが、日本は特別で、なんでも極意書ときて次に齋戒沐浴、曰いわく言い難しとくる。私はタバコが配給になつて生れて始めてキザミを吸つたが、昔の人間だつて三服四服はつづけさまに吸つた筈はずで、さすればガン首の大きいパイプを発明するのが当然の筈であるのに、そういう便利な実質的な進歩発明という算段は浮かばずに、タバコは一服吸つてポンと叩たたくところがよいな

どというフザけた通が生れ育ち、現実に停止して進化が失われ、その停止を弄もてあそんでフザけた通や極意や奥義書が生れて、実質的な進歩、ガン首を大きくしろというような当然な欲求は下品なもの、通ならざる俗なものと考えられてしまうのである。キセルラオの羅宇は仏印ラオス産の竹、羅宇竹から来た名であるが、キセルは羅宇竹に限るなどと称して通は益ますます々実質を離れて枝葉に走る。フオークをひっくりかえして無理にむつかしく御飯をのせて変てこな手つきで口へ運んで、それが礼儀上品なるものと考えられて疑うたぐられもしない奇妙奇天烈きてれつな日本であつた。実質的な便利な欲求を下品と見る考えは随所に様々な形でひそんでいるのである。

この歪ゆがめられた妖怪ようかい的な日本的思考法の結び目に当る伏魔殿

が家庭感情という奴で、日本式建築や生活様式に規定された種々雑多な歪みはとにかくとして、平野謙ひらのけんなどという良く考える批評家まで、特攻隊は女房があつては出来ないね、などとフザけたことを鵜呑みうのにして疑ふことすらないのである。女房と女と、どこが違うのだろう。女房と愛する人と、どこに違いがあるというのか。誰か愛する人なき者ありや。鐘の音がボンと鳴つてその余韻の中に千万無量の思いがこもつていたり、その音に耳をすまして二十秒ばかりで浮世の垢あかを流したり、海苔のりの裏だか表だかのどっちか側から一方的にあぶらないと味がどうだとか、フザけたことにかかずらつて何百何千語の註ちゅうしやく釈しゃくをつけたり、果ては奥義書や秘伝を書くのが日本的思考の在り方あで、近頃は女房の眉まゆを

落させたりオハグロをぬらせることは無くなつたが、刺青いれずみと大して異ならないかかる野蛮な風習でもそれが今日残存して現実の風習であるなら、それを疑るよりも、奥義書を書いて無理矢理に美を見出し、疑る者を俗なる者、野卑にして素朴なる者ときめつけるのが日本であつた。女房のオハグロは無くなつたが、オハグロ的マジナイは女房の全身、全心、魂の奥底にまで絡からみついてきており、それが先まず日本の幽霊の親分で、平野謙のように私などよりも考える時間が余程多いらしい人ですら、人間の姿を諸もろも々の幽霊から本当に絶縁しようという大事な根本的な態度を忘れ、多くは枝葉に就つて考える時間が多いのではないかと思う。彼は人の小説を厭いやになるほどたくさん読むが、僕が三行読んで投げ

出すものを彼は三千万語の終りまで無理に読み、無理に幽霊をで
つちあげ、そして自分の本当の心と真に争う、自分の幽霊と命を
賭^としても争うという大事なたった一つのこと忘れられているの
だ。

日本の家庭感情の奇怪な歪みは浮世に於^{おい}ては人情義理という怪
物となり、離俗の世界に於てはサビだの幽玄だのモノノアワレな
どという神秘の扉の奥に隠れて曰く言い難きものとなる。ポンと
両手を打ち鳴らして、右が鳴ったか左が鳴ったかなどと云つて、
人生の大真理がそんな所に転がっていると思ひ、大將軍大政治家
大富豪ともならん者はそういう悟りをひらかなければならないな
どと、こういうフザけたことが日本文化の第一線に堂々通用して

いるのである。西洋流の学問をして実証精神の型が分るとこいう一見フザけたことはすぐ気がつくが、つけ焼刃で、こんていてき根柢的に日本の幽霊を退治したわけではなく、むしろ年と共に反動的な大幽霊と自ら化して、サビだの幽玄だの益々執念を深めてしまう。学問の型を形の如くごとに勉強するが、自分自身というものに就て真実突きとめて生きなければならぬという唯一のものが欠けているのだ。

毎々平野謙を引合いにして恐縮だが、先頃彼の労作二百余枚の「しまざきとうそん島崎藤村の『新生』に就て」を読んだからで、他の批評家

先生は駄文ばかりで、いかさま私が馬鹿げたヒマ人でも駄文を相手にするわけには行かない。

「新生」の中で主人公が自分の手をためつすかしつ眺めて、この手だな、とか思い入れよろしくわが身の罪の深さを思うところが人生の深処にふれているとか、鬼気せまるものがあるとか、平野君、フザけたもうな。人生の深処がそんなアンドンの灯の翳かげみたいなボヤけたところにころがつていて、たまるものか。そんなところは藤村の人を甘く見たゴマ化し技法で、一番よくないところだ。むしろ最も軽蔑すべきところである。こんな風には書けば人が感心してくれると思つて書いたに相違ないところで、第一、平野君、自分の手をつくづく眺めてわが身の罪の深さを考える、具体的事実として、それが一体、何物です。

自分の罪を考える、それが文学の中で本当の意味を持つのは、

具体的な行為として倫理的に発展して表われるところにあるので、手をひっくり返して眺めて鬼気迫るなどは、ボーンという千萬無量の鐘の思いと同じこと、海苔をひっくり返して焼いて、味がどうだというような日本の幽霊の一匹にすぎないのである。

島崎藤村は誠実な作家だというけれども、実際は大いに不誠実な作家で、それは藤村自身と彼の文章（小説）との距離というものを見れば分る。藤村と小説とは距へだたりがあつて、彼の分りにくい文章というものはこの距離をごまかすための小手先の悪戦苦闘で魂の悪戦苦闘というものではない。

これと全く同じ意味の空虚な悪戦苦闘をしている人に横よこ光利みつりい一ちがあり、彼の文学的懊お惱のうだの知性だのというものは、距離

をぐまかす苦悩であり、もしくは距離の空虚が描きだす幻影的自我の苦悩であつて、彼には小説と重なり合つた自我がなく、従つて眞実の自我の血肉のこもつた苦悩がない。

このように、作家と作品に距離があるということは、その作家が処世的に如何ほど糞マジメで謹厳誠実であつても、根柢的に魂の不誠実を意味している。作家と作品との間に内容的には空白なききようざつぷつ夾雑物があつて、その空白な夾雑物が思考し、作品をあやつ

り、あまつさえ作家自体、人間すらもあやつっているのだ。平野謙にはこの距離が分らぬばかりでなく、この距離自体が思考する最も軽薄なヤリクリ算段が外形的に深刻真摯しんしであるのを、文学の深さだとか、人間の複雑さだとか、藤村文学の貴族性だとか、又

は悲痛なる弱さだとか、たとえばそのように考えているのである。

藤村は世間的処世に於ては糞マジメな人であつたが、文学的には不誠実な人であつた。したがつて彼の誠実謹嚴な生活自体が不健全、不道德、にせもの贗物であつたと私は思う。

彼は世間を怖れておそいたが、文学を甘くみくびつていた。そして彼は処世的なマジメさによつて、真実の文学的懊悩、人間的懊悩を文章的に処理しようとし、処理し得るものとタ力をくくつていた。したがつて彼は真実の人間の懊悩を真に悩み又は突きとめようとはせず、ただ処世の便法によつて処理し、終生自らの肉体的な論理によつて真実を探求する真の自己破壊というものを凡そおよ影すらも行いはしなかつた。

距離とは、人間と作品の間につまるこの空白をさすのであり、肉体的な論理によつて血肉の真実が突きとめられ語られていないことを意味している。こう書けば、こう読み、こう感心するだろうぐらいに、批評家先生などは最も舐め^なられていたのである。批評家をだますぐらいいわけのないことはない。批評家は作家と作品の間の距離などは分らず、本人自身の書くものが距離だらけで、距離をごまかすためのヤリクリが文学のむつかしい所だぐらいに考えており、藤村ほどの不器用な人でも批評家とはケタの違う年期のはいった筆力があるから、批評家をごまかすぐらいはわけがない。問題は如何^{いか}に生^かくべきか、であり、然^{しか}して如何に真実に生きているか、文章に隠すべからざる距離によつて作家は秘密の真

相を常に暴露しているのである。



藤村も横光利一も糞マジメで凡そ誠実に生き、かりそめにも遊んでいないような生活態度に見受けられる。世間的、又、態度的には遊んでいないが、文学的には全く遊んでいるのである。

文学的に遊んでいる、とは、彼等にとって倫理は自ら行うことではなく、論理的に弄ばれているにすぎないということ、要するに彼等はある型によつて思考しており、肉体的な論理によつて思考してはいないことを意味している。彼等の論理の焦点はそれ

自らの合理性ということ、理論自体が自己破壊を行うことも、盲目的な自己展開を行うことも有り得ないのである。

かかる論理の定型性というものは、一般世間の道徳とか正しい生活などと称せられるものの基本をなす贗物の生命力であつて、すべて世の謹厳なる道徳家だの健全なる思想家などというものは例外なしに贗物と信じて差支えはない。本当の倫理は健全ではないものだ。そこには必ず倫理自体の自己破壊が行われており、現実に對する反逆が精神の基調をなしているからである。

藤村の「新生」の問題、叔父おじと姪めいとの関係は問題自体は不健全だが、小説自体は馬鹿馬鹿しく健全だ。この健全とは合理的だということ、自己破壊がなく、肉体的な論理の思考がない代りに、

型の論理が巧みに健康に思考しているという意味なのである。

藤村が眞実怖れ悩んでいることは小説には表われていない。それに又、彼が眞実怖れ悩んでいることは決して文学自体の自己探求による悩みではなく、単に世間ということであり、対世間、対名誉、それだけの「健康」なものだった。彼はちようど、例えば全軍の先頭に死なざるを得なかった將軍の場合と同じように（この將軍が本当は死を怖れていることは敗戦後我々は多すぎる実例を見せられてきた）藤村も勇をふるって己れと姪との關係を新聞に発表した。けれども將軍の遺書が尽忠報国の架空かくうの美文でうめられていると同様に、彼の小説は型の論理で距離の空白をうめているにすぎない。

何故^{なにゆえ}彼は「新生」を書いたか。新らしい^{あた}生の発見探求のためであるには余りにも距離がひどすぎる。彼はそれを意識していなかつたかも知れぬ。そして彼は自分では真実「新生」の発見探求を賭^かけているつもりであつたかも知れないのだが、如何^{いかん}せん、彼の態度は彼自身をすらあざむいており、彼が最も多く争つたのは文学のための欲求ではなく、彼は名誉と争い、彼自らをも世間と同時にあざむくために文学を利用したのだと私は思う。私がこれを語っているのではなく、「新生」の文章の距離自体がこれを語っているのである。彼は告白することによつて苦悩が軽減し得ると信じ、苦悩を軽減し得る自己救済の文章を工夫した。作中の自己を苦しめる場合でも、自分を助ける手段でしかなかつた。彼は

真に我が生き方の何物なりやを求めていたのではなく、ただ世間の道德の型の中で、世間を相手に、ツジツマの合った空論を弄ろうして大小説らしき外見の物を書いてみせただけである。これも彼の文章の距離自体が語っているのである。

彼がどうして姪という肉親の小娘と情じょうよく慾よくを結ぶに至るかというのと、彼みたいにもない取澄し方をしていると、知らない女の人を口説くどく手掛りがつかめなくなる。彼が取澄せば女の方はよけい取澄して応じるものであるから、彼は自分のポーズを突きぬけて失敗するかも知れぬ口説くどきにのりだすだけの勇氣がないのだ。肉親の女にはその障壁がないので、藤村はポーズを崩す怖れなしにかなり自由に又自然にポーズから情慾へ移行することが出来易

かつたのだと思う。

彼は姪と関係してその処理に苦しむことよりも、ポーズを破つて知らない女を口説く方がもつと出来にくかつたのだ。それほど彼はポーズに憑つかれており、彼は外形的に如何いかにも新しい道徳を探しもとめているようでありながら、芸者を芸者とよばないで何だか妙な言い方で呼んでいるというだけの、全く外形的な、内実ではより多くの例の「健全なる」道徳に呪じゆばく縛ばくせられて、自我の本性をポーズの奥に突きとめようとする欲求の片鱗へんりんすらも感じてはいない。眞実愛する女をなぜ口説くことが出来ないのか。姪と関係を結んで心ならずも身にふりかかつた処世的な苦悩に対して死物ぐるいで処理始末のできる執拗しつような男でいながら、身に

ふりかかった苦悩には執拗に堪え抵抗し得ても、自らの本当に欲する本心を見定めて苦悩にとびこみ、自己破壊を行うという健全なる魂、執拗なる自己探求というものはなかつたのである。

彼は現世に縛られ、通用の倫理に縛られ、現世的に墮落ができなかつた。文学の本来の道である自己破壊、通用の倫理に対する反逆は、彼にとっては墮落であつた。私は然ししか彼が眞実欲する女を口説き得ず姪と關係を結ぶに至つたことを非難しているのではない。人各々の個性による如何なる生き方も在りうるので、眞実愛する人を口説き得ぬのも仕方がないが、なぜ藤村が自らの小さな眞実の秘密を自覚せず、その悲劇を書き得ずに、空虚な大小説を書いたかを咎とがめているだけのことである。芥川あくたがわが彼を評し

て老^{ろう}癡^{かい}と言つたのは当然で、彼の道徳性、謹厳誠実な生き方は、文学の世界に於ては欺^{ぎまん}瞞であるにすぎない。

藤村は人生と四ツに組んでいるとか、最も大きな問題に取組んでいるとか、欺瞞にみちた魂が何者と四ツに組んでも、それはただ常に贗物であるにすぎない。バルザックが大文学でモオパッサンが小文学だという作品の大小論はフザけた話である。藤村は文学を甘く見ていたから、こういう空虚軽薄な形だけの大長篇をオカユをすすつて書いていられたので、贗物には楽天性というものはない。常にホンモノよりも深刻でマジメな顔をしているものなのである。いつか銀座裏の酒場に坂口安吾のニセモノが女を口説いて成功して、他日無能なるホンモノが現れたところ、女共は疑

わしげに私を眺めて、あなたがホンモノなのかしら。ニセモノはもつとマジメな深刻な人だったわよ、と言った。



私は世のいわゆる健全なる美德、清貧だの儉約の精神だの、困苦欠乏に耐える美德だの、謙讓の美德などというものはみんな嫌いで、美德ではなく、悪徳だと思っている。

困苦欠乏に耐える日本の兵隊が困苦欠乏に耐え得ぬアメリカの兵隊に負けたのは当然で、耐乏の美德という日本精神自体が敗北したのである。人間は足があるからエレベーターでたった五階六

階まで登るなどとは不健全であり墮落だという。機械にたよつて
肉体労働の美德を忘れるのは墮落だという。こういうフザけた退
化精神が日本の今日の見事な敗北をまねいたのである。こういう
馬鹿げた精神が美德などと疑られもしなかつた日本は、どうし
ても敗^まけ破れ破滅する必要があつたのである。

然^{しか}り、働くことは常に美德だ。できるだけ楽に便利に能率的に
働くことが必要なだけだ。ガン首の大きなパイプを発明するだけ
の實質的な便利な進化を考え得ず、一服吸つてポンと叩く心境の
サビだの美だのと下らぬことに奥義書を書いていた日本の精神は
どうしても破滅する必要があつたのだ。

美しいもの、楽しいことを愛するのは人間の自然であり、ゼイタ

クや豪奢ごうしゃを愛し、成金は俗悪な大邸宅をつくつて大いに成金趣味を發揮するが、それが万人の本性であつて、毫ごうも輕蔑すべきところはない。そして人間は、美しいもの、楽しいこと、ゼイタクを愛するように、正しいことをも愛するのである。人間が正しいもの、正義を愛す、ということとは、同時にそれが美しいもの楽しいものゼイタクを愛し、男が美女を愛し、女が美男を愛することなどと並立して存する故ゆえに意味があるので、悪いことをも欲する心と並び存する故に意味があるので、人間の倫理の根元はここにあるのだ、と私は思う。

人間が好むものを欲しもとめ、男が好きな女を口説くことは自然であり、当然ではないか。それに対してイエスとノーのハツキ

りした自覚があればそれで良い。この自覚が確立せられず、自分の好悪、イエスとノーもハッキリ言えないような子供の育て方の不健全さというものは言語道断だ。

処女の純潔などというけれども、一向に実用的なものではないので、失敗は成功の母と言ひ、失敗は進歩の階段であるから、処女を失うぐらい必ずしも咎むべきではなからう。純潔を失うなどと云つて、ひどい墮落みちのようたどに思いこませるから罪悪感によつて本格的に墮落みちの路たどを辿るようになるので、これを進歩の段階と見より良きものを求める為ための尊い捨石であるような考え方生き方を与える方が本当だ。より良きものへの希求が人間に高さと品位を与えるのだ。単なる処女の如き何物でもないではないか。尤も無

理にすて去る必要はない。要は、魂の純潔が必要なだけである。

失敗せざる魂、苦惱せざる魂、そしてより良きものを求めざる魂に真実の魅力はすくない。日本の家庭というものは、魂を昏こんす酔いさせる不健康な寢床で、純潔と不変という意外千万な大看板をかかげて、男と女が下落し得る最低位まで下落してそれが他人でない証拠なのだと思つている。家庭が娼婦の世界によつて簡単に破壊せられるのは当然で、娼婦の世界の健康さと、家庭の不健康さに就て、人間性に根ざした究明が又文学の変らざる問題の一つが常にこのことに向つて行われる必要があつた筈だと私は思う。娼婦の世界に単純明快な真理がある。男と女の真実の生活があるのである。だましあい、より美しくより愛らしく見せようとし、

実質的に自分の魅力のなかで相手を生かさせようとする。

別な女に、別な男に、いつ愛情がうつるかも知れぬという事の中には人間自体の発育があり、その関係は元来健康な筈なのである。然しなるべく永遠であろうとすることも同じように健康だ。そして男女の価値の上に、肉体から精神へ、又、精神から肉体へ価値の変化や進化が起る。価値の発見も行われる。そして生活自体が発見されているのである。

問題は単に「家庭」ではなしに、人間の自覚で、日本の家庭はその本質に於て人間が欠けており、生殖生活と巢を営む本能が基礎になっているだけだ。そして日本の生活感情の主要な多くは、この家庭生活の陰鬱いんうつさを正義化するために無数のタブーをつく

つており、それが又思惟しゐいや思想の根元となつて、サビだの幽玄だの人間よりも風景を愛し、庭や草花を愛させる。けれども、そういう思想が贗物にすぎないことは彼等自身が常に風景を裏切つており、日本三景などというが、私は天あまの橋はし立たてというところへ行つたが、遊覧客の主要な目的はミヤジマの遊びであつたし、伊い勢せだ大神宮いじんぐう参拝の講中ねらが狙つているのも遊び場で、伊勢の遊び場は日本に於て最も淫靡いんびな遊び場である。尤も日本の家庭が下等愚劣なものであると同様に、これらの遊び場にもただ女の下等な肉体がころがつているにすぎないのである。

なつめそうせき

夏目漱石なつめそうせきという人は、彼のあらゆる知と理を傾けて、こういう家庭の陰鬱さを合理化しようと不思議な努力をした人で、そし

て彼はただ一つ、その本来の不合理的を疑ふことを忘れていた。つまり彼は人間を忘れていたのである。かゆい所に手がとどくとは漱石の知と理のことで、よくもまあこんなことまで一々気がつくものだと思ふばかり、家庭の封建的習性というもののあらゆる枝葉末節のつながりへ万べんなく思惟がのびて行く。だが習性の中にも在る筈の肉体などは一顧も与えられておらず、何よりも、本来の人間の自由な本姿が不問に附ふされているのである。人間本来の欲求などは始めから彼の文学の問題ではなかった。彼の作中人物は学生時代のつまらぬことに自責して、二、三十年後になつて自殺する。奇想天外なことをやる。そのくせ彼の大概の小説の人物は家庭的習性というものにギリギリのところまで追いつめられ

ているけれども、離婚しようという実質的な生活の生長について考えを起した者すらないのである。彼の知と理は奇妙な習性の中で合理化という遊戯にふけつていてだけで、真実の人間、自我の探求というものは行われていない。自殺などというものは悔恨の手段としてはナンセンスで、三文^{さんもん}の値打もないものだ。より良く生きぬくために現実の習性的道徳からふみ外れる方^{はず}が遥か^{はる}に誠実なものであるのに、彼は自殺という不誠実なものを誠意あるもの^{はず}のと思い、離婚という誠意ある行為を不誠実^{はず}のと思い、このナンセンスな錯覚を全然疑ることがなかった。そして悩んで禅の門を叩く。別に悟りらしいものもないので、そんなら仕方がないと諦め^{あきら}る。物それ自体の実質に就てギリギリのところまで突きとめはせ

ず、宗教の方へでかけて、そつちに悟りがないというので、物それ自体の方も諦めるのである。こういう馬鹿げたことが悩む人間の誠実な態度だと考えて疑ることがないのである。日本一般の生活態度が元来こういうフザけたもので、漱石はただその中で^{げんが}街学的な形ばかりの知と理を働かせてかゆいところを^か搔いてみただけで、自我の誠実な追求はなかった。

元より人間は思い通りに生活できるものではない。愛する人には愛されず、欲する物は我が手に入らず、手の中の玉は逃げだし、希望の多くは^{あだゆめ}仇夢で、人間の現実^{げんじつ}は概ねかくの如き卑小きわまるものである。けれども、ともかく、希求の実現に努力するところに人間の生活があるのであり、夢は常にくずれるけれども、諦

めや慟哭どうこくは、くずれ行く夢自体の事実の上に在り得るので、思惟として独立に存するものではない。人間は先ず何よりも生活しなければならぬもので、生活自体が考えるとき、始めて思想に肉体が宿る。生活自体が考えて、常に新たな発見と、それ自体の展開をもたらしてくれる。この誠実な苦悩と展開が常識的に悪であり墮落であつても、それを意とするには及ばない。

私はデカダンス自体を文学の目的とするものではない。私はただ人間、そして人間性というものの必然の生き方をもとめ、自我自らを欺くことあざむなく生きたい、というだけである。私が憎むのは「健全なる」現実の贗道徳で、そこから誠実なる墮落を怖れないことが必要であり、人間自体の偽らざる欲求に復帰することが必

要だというだけである。人間は諸々の欲望と共に正義への欲望がある。私はそれを信じ得るだけで、その欲望の必然的な展開に就ては全く予測することができない。

日本文学は風景の美にあこがれる。然し、人間にとって、人間ほど美しいものがある筈はなく、人間にとっては人間が全部のものだ。そして、人間の美は肉体の美で、キモノだの装飾品の美ではない。人間の肉体には精神が宿り、本能が宿り、この肉体と精神が織りだす独得の^{あや}絢は、一般的な解説によって理解し得るものではなく、常に各人各様の発見が行われる永遠に独自なる世界である。これを個性と云い、そして生活は個性によるものであり、元来独自のものである。一般的な生活はあり得ない。めいめいが

各自の独自のなそして誠実な生活をもとめることが人生の目的でなく、他の何物が人生の目的だろうか。

私はただ、私自身として、生きたいだけだ。

私は風景の中で安息したいとは思わない。又、安息し得ない人間である。私はただ人間を愛す。私を愛す。私の愛するものを愛す。徹頭徹尾、愛す。そして、私は私自身を発見しなければならぬ。徹頭徹尾、愛す。そして、私は私自身を発見しなければならぬ。ないように、私の愛するものを発見しなければならぬので、私は墮ちつづけ、そして、私は書きつづけるであろう。神よ。わが青春を愛する心の死に至るまで衰えざらんことを。

青空文庫情報

底本：「墮落論・日本文化私観 他二十二篇」岩波文庫、岩波書店

2008（平成20）年9月17日第1刷発行

2013（平成25）年4月5日第6刷発行

底本の親本：「坂口安吾全集 04」筑摩書房

1998（平成10）年5月22日

初出：「新潮 第四三卷第一〇号」

1946（昭和21）年10月1日

入力：Nana ohbe

校正：酒井裕二

2015年12月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

デカダン文学論

坂口安吾

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>